



第10回

ソフトバンクグループ決算

※2023年5月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 3

ソフトバンクグループ(SBG)が2023年3月期の連結決算で、2期連続の赤字を計上した。株式市況の低迷などを受け、収益の柱とする運用先の投資ファンドの損失が膨らんでいる。世界経済が減速し市場は今後も不安定な状況が続きそうだ。難局を打開する手立てはあるのか――。

「今年はしっかりチェックしながら、少しずつ(投資に)取り組んでいきたい。いきなり青信号でどんと進むということではない」5月11日に東京都内で開いた決算記者会見で、SBGの後藤芳光・最高財務責任者(CEO)は今後の投資方針について慎重な姿勢を崩さなかった。

SBGは携帯電話大手のソフト

バンクを傘下に持つが、グループの全体像は様相が異なる。17年にサウジアラビアの政府系ファンドと共同で「ソフトバンク・ビジョン・ファンド(SVF)」を設立。人工知能(AI)分野など世界の振興企業に投資している。19年に孫正義会長兼社長は「もはや事業会社ではない」と投資会社化を自ら宣言した。

業績はそれ以降、乱高下が目立つようになる。連結最終(当期)損益は20年3月期に9615億円の赤字に陥り、21年3月期は一転して日本企業としては過去最高となる4兆9879億円の黒字を達成。22年3月期は1兆7080億円の大赤字に再び転落した。

20年3月期は新型コロナウイルス

スの感染拡大による投資先の業績低迷が影響した。当時、孫子は「上り坂を一生懸命駆け上っていたユニコーン（将来性が高いベンチャー企業）に突然コロナの谷がやってきた」と語った。21年3月期は社会のデジタル化が加速。IT関連を中心に株価が上昇し、巨額の投資利益を得た。

その後はロシアのウクライナ侵攻の長期化や米中対立などを背景に、インフレが加速。米欧が金融緩和に転じ、投資先の企業価値は下落した。景気後退懸念が高まる中、23年3月期の最終損益は9701億円の赤字となった。SVFの投資損失は約5兆3000億円に上り、中国の電子商取引大手アリババグループの保有株をほとんど手放して、なんとか損失を回避した形だ。

ベンチャーは資金力が乏しい企業が多く、株価下落や景気悪化の局面ではあっけなく経営破綻するケースが少ない。SBGはここ数年の経済環境の激変の影響をもち

に受け、極めて不安定な経営を強いられているのが実態だ。このため、最近は守りを固める方向にかじを切り、SBGを通じた投資は控えている。22年度の投資額は約440億ドル（約6兆円）だったが、23年度は約30億ドルにとどめた。投資資金の借り入れなどで巨額の有利子負債を抱えており、その返済や自社株買いを優先している。

足元では米欧の金融不安が悩み種だ。銀行が融資を控え、投資先の資金繰り悪化が懸念される中、後藤氏は「SVFの投資先の94%は1年以上の運転資金を保有している」と説明するが、守りから攻めの姿勢に転じにくい状況となっている。

投資の代わりに注力するのが16年に約3兆3000億円で買収した英半導体開発大手アームの上場だ。4月末に米株式市場への上場を申請した。後藤氏は昨年11月の決算記者会見で「アームの成長に没頭する」と述べ、その後は決算会見に姿を見せなくなった。上場

後に市場価値が上がれば保有株を担保とした資金調達力が増し、売却時には大きな利益を得られるため、同社にかかる期待は大きく、後藤氏は11日の決算会見で「(上場の)準備は非常に順調に進んでいる」と自信を見せた。